

Newsletter

November 2017

<http://www.aack.or.jp>

目次

3回の越冬を経験して

北大山の会 樋口和生1

中国 1980年代を思い起した

ミニャ・コンガにいたる旅

上田 豊5

第42回雲南懇話会 (2017年9月24日開催)

講演概要

山岸久雄11

原稿募集 笹ヶ峰ヒュッテについて14

編集後記14

3回の越冬を経験して

北大山の会 樋口和生

南極事始め

「南極に行かないか」

北海道の山屋で知らないともぐりと言われる飲み屋「つる」にふらりと訪れた時、珍しく東京からやって来てカウンターに座っていた白石和行さん（北大山の会・前国立極地研究所長）から声を掛けられた。

白石さんは北大山岳部の先輩だが、年代が離れているので一緒に山に登ったことはなく、山の会の集まりでたまに顔を合わせる程度だったが、私のことを覚えていてくれて、カウンターに相席させてもらっていた。

聞くと、南極観測の現場、特に野外の安全管理が喫緊の問題だという。以前と比べると登山経験のある隊員が極端に減り、安心して野外の安全管理を任せられる人が少なくなっているという。

当時札幌で山岳ガイドを生業としていた私は、小さいながらも事務所を構え、若いスタッフとともに一年中山に入る生活をしていた。

話を聞いて行ってみたいと思ったものの、すぐに「行きます」とは言えなかった。

翌朝、酔いの醒めた頭で前夜の会話を思い出し、はやる心を抑えつつ冷静になって考えてみる。

ガイドの仕事始めて15年目、仕事の方向性を模索していた時期ということもあって、これまでの経験を南極の現場で活かして行くことができたなら面白いだろうな、しばらく南極のことを真剣に考えてみようかと思いつくに至るにそれほど時間はかからなかった。

山岳ガイドというのは、素人と一緒に山に入り、日々安全管理を行いつつ山を楽しんでもらうことで成り立つ職業だ。求められるのは超一流の登山技術というよりは、どちらかといえばコミュニケーションの能力であり、様々な危機を回避する能力であり、いざという時に皆を率いて難を逃れることのできるリーダーシップだ。そういった現場で培ってきたノウハウを南極で活かすことができたなら、自分自身だけでなく山岳ガイドという職業に広がりが出るのではないかと。また、研究者たちをサポートすることによって、間接的ではあるが地球環境問題の取り組みに貢献できる。こんな思いが頭の中をよぎった。

それから約3年、周囲の様々な協力もあって、2008年にフィールドアシスタント（現在は野外観測支援と改称）隊員として第50次隊に参加することとなった。

50次隊では、まず野外装備の改善に取り組

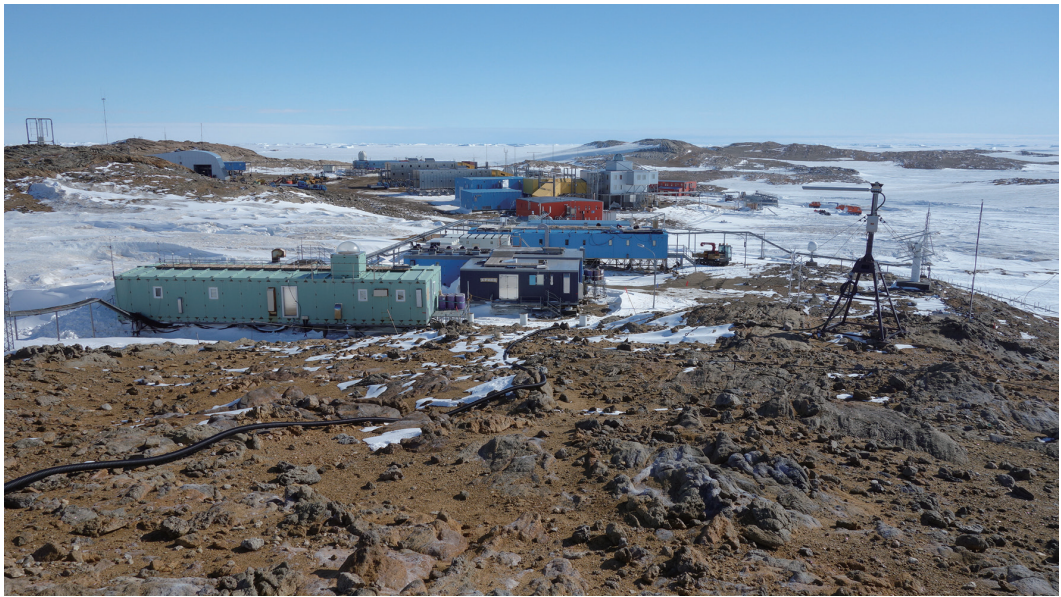


写真1 昭和基地主要部

東側の高台から昭和基地の主要部を撮影。手前の平屋は観測用の施設。奥に見える変わった形をした3階建の建物が管理棟。左手のスカイライン上に見える四角い形をしたものは、垂直軸型の20kw風力発電装置。



写真2 海氷上のルート工作

海水にドリルで穴を開け、積雪深と氷厚を測り、安全を確認した上で目印の赤旗を設置。旗の位置をハンディGPSで測位し、旗と旗の間の方角と距離を計測する。数百メートル毎に同じ作業を繰り返し、ルートを延ばして行く。

み、十年一日のごとく変わらなかった装備を時代に合ったものに変えた。科学技術の進歩とともに登山装備も進歩を続けているが、それまでの南極観測隊が身につけていたものは時代から

取り残されたようなものが多く、改善の余地はたくさんあった。

越冬中には、それまで現場任せにされていた訓練内容を見直し、どの隊でも共通して必要となる技術や知識をカリキュラム化して、隊の構成員によって伝える内容にムラが出ないようにした。

ただ、初参加ということもあって、1年間の時の流れ、隊全体としてのスケジュールを十分に把握できていなかったために、自分がイメージしていた仕事をやりとげるには時間が足りないことに途中で気づき、翌年出発する52次隊に昭和基地から応募することにした。

51次隊の野外観測支援担当には、懇意にしている札幌の山岳ガイドが着任し、50次隊で着手した装備の改善や訓練のカリキュラム化をさらにブラッシュアップしてくれ、それをさらに52次隊で私が担当することで何とか形にできたと思っている。

野外観測支援の仕事は、海氷上の移動ルートを作ったり、現場での安全管理をするだけでなく、観測隊内での野外計画のとりまとめや、スケジュールの管理、人員の配置など多岐にわたる。もちろんこれらの仕事を一人でできるわけではなく、他の隊員のサポートに依るところも

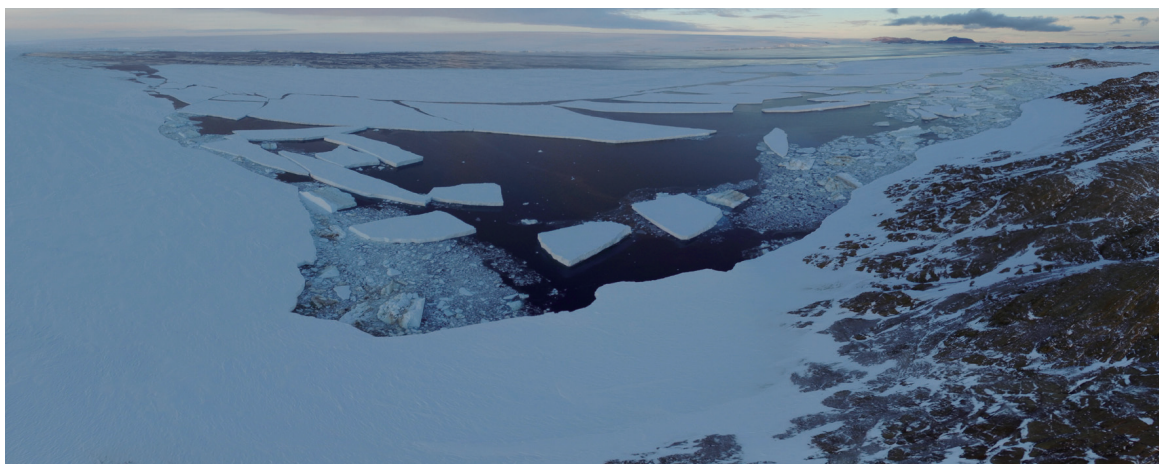


写真3 オングル海峡パノラマ

2016年4月、昭和基地周辺の海水が10年ぶりに流出。海氷上の行動は極夜明けまで見合わせるようになった。

多いが、現場は違ってガイドの仕事と通じるところは多い。

現場を経験してみると、確かに野外の経験を殆ど持たない隊員が多く、中には南極観測隊に関わるまで寝袋で寝たことがなかったという隊員もいて、それが決して珍しくないということがわかってきた。それを時代の趨勢ということもできるかもしれないが、一方でそういう人でも南極で過ごすことができるように基地の環境を整えてきたとも言える。

昭和基地の設備

現在の昭和基地には、既に使われなくなった建物も含め、大小約60棟の建物がある。

隊員が暮らす居住区は通路でつながり、管理棟と呼ばれる3階建の建物には、隊長室、通信室、食堂、厨房、医務室、娯楽室、バーなどがあり、生活の中心となっている。2棟ある居住棟には、広さ3畳ほどの隊員の個室が並び、遮音効果はいまひとつではあるが、プライバシーはある程度守られている。

発電棟には300kVAのディーゼル発電機が2機あり、交互に運転して、一部の観測機器を除いて基地内のほぼすべての電気を賄っている。風力発電と太陽光発電も導入され、わずかながらも再生可能エネルギーの利用も進んでいるが、ディーゼル発電機との連携はまだ完成しておらず、今後の課題として残っている。

また、発電棟にはトイレ、洗面所、風呂もあつ

て、トイレには温水洗浄便座が完備され、風呂は循環式で24時間暖かい。

生活水は雪を融かして利用しているが、発電機の廃熱を利用したコジェネレーションシステムを導入しており、ダムを融かして発電棟にポンプで送り、発電機のラジエーターから熱交換をして温水として利用している。

生活排水は、小型の污水处理プラントで処理され、国内基準を上回る清浄さを保って海に排出されている。

廃棄物は、可燃性のものは焼却炉で燃やして消却灰をドラム缶に詰め、その他のものは分別して国内に持ち帰っている。

これらの設備の維持を任されている設営隊員は1年中気を抜く暇はないのだが、おかげで住環境は快適で、厳寒期を除けば基地内は半袖でも過ごせるほどだ。

このように基地の生活はかなり快適で、野外経験の少ない人でも比較的安全に過ごすことができるが、建物から一歩外に出るとそこは昔と変わらない自然環境が広がっている。

3度目の越冬

「越冬隊長として南極に行ってほしい」

3度目の越冬は、白石所長のこのひと言から始まった。

52次隊から帰国後、私は国立極地研究所の職員となり、南極観測センター設営グループ(旧設営室)に配属されていた。「50歳で就職です



写真4 昭和基地沖の海氷上に着陸した飛行機
10月末から3月上旬まで、日本を含む11カ国で共同運行する航空網による飛行機の運行が行われている。写真は、昭和基地近くの海氷上に整備した滑走路に給油のために降り立ったバスターボ機。

か」などと周りから冷やかされたが、2度の越冬経験を今度は送り出す側として役立てることができるといことで、極地研からの誘いに応じるのに迷いはなかった。

環境保全、医療、安全対策を主担当として業務にあたってはいたが、チャンスがあればもう一度南極に行きたいという気持ちは常に持ち続けていた。

とはいえ、隊長は重責だ。自分に勤まるのか。

少し迷いはあったものの、南極に行きたい気持ちに勝てず、それ以上に自分をここまで買ってくれている周囲の人の期待に答えたいという思いもあって引き受けることにした。

隊員を無事に家族のもとに帰すことを自分自身の最大のミッションとして、できるだけ自然



写真5 ラングホブデ氷河ルート工作中的の筆者
2012年1月、昭和基地の南方約30kmにあるラングホブデ氷河で、熱水掘削による氷河調査が行なわれた。

体で頑張りすぎないことを肝に銘じ、その上で観測隊としてのミッションを最大限に達成するという目標を掲げて1年を過ごすことにした。

10年ぶりに昭和基地周辺の海氷が流出し、例年よりもブリザードの回数が多く、積雪の多さに閉口するなど、予期せぬ出来事や苦勞も多かったが、少し時間が経った今となっては、隊員に助けられて1年を何とか乗り切り、けが人も出さずに過ごせたことはありがたいことだと思っている。

近況報告にかえて

まだ子どもだった頃、我が家は2DKの公団住宅に暮らしていた。

そこには「山のお兄ちゃん」達がしょっちゅう出入りして、酒を酌み交わし、ヒマラヤだ、南極だと夜が更けるのも気にせずいつまでも楽しそうに話をしていた。

私と姉は押入れに寝かされ、襖越しに聞こえてくる話を子守唄のようにして眠りについた。朝起きると、板の間や食卓の下で寝袋にくるまって芋虫のようになった人たちがいて、その人たちを踏みつけないように跨ぎ、ランドセルを背負って学校に出かけたことを覚えている。

ガネッシュが2歳、ヤルンカンが小学校5年生の時。他にも偵察だ、氷河調査だと父・明生はしょっちゅうどこかに出かけていた。

父と一緒に山に登ったことはなかったが、幼少期のそんな体験が刷り込みとなって、今こんなことをやっているのではないかと思う時がある。

「山のお兄ちゃん」の一人である横山宏太郎さんから原稿を頼まれた時、少し躊躇した。

錚々たるAACKの人たちに読んでもらう原稿を書けるのかと。

でもどうせお里は知れているのだしと開き直ることにして、近況報告のつもりで駄文をしたためた。

宏太郎さんの期待にはそぐわなかったかも知れないが、どうかご容赦いただきたい。

南極観測を精力的に牽引してきた世代の人たちの引退が相次ぎ、次の世代にバトンタッチされようとしている。

昭和基地を将来的にどのように運営していく

のかという議論も始まった。

60年の歴史を背負いつつ、研究者のニーズ、時代のニーズに応えられるよう、今後の展開を模索していきたいと思う。

编者注

樋口和生さんは、本文中にあるように、ご自身3回目の越冬となる第57次日本南極地域観測隊では越冬隊長を務め、本年3月に無事帰国

されました。4月からは、国立極地研究所 南極観測センターの設営業務担当マネージャーとして、南極観測隊の活動を支える重要な立場でご活躍です。

このたびは第59次隊の出発に向けての準備作業をはじめご多忙のところへの原稿依頼でしたが、ご快諾・ご寄稿いただき、たいへんありがとうございました。

中国 1980年代を思い起したミニャ・コンガにいたる旅

上田 豊

1. 書くことになろうとは

2016年8月21日、中国から思いがけないメールが届いた。送信者は、20年ほど前に名大のわたしの研究室に数カ月滞在した蘭州氷河凍土研究所(当時)のLIU Shiyinだった。その際は、シシャパンマ北側の氷河観測結果を論文にまとめるのを手伝った。

用件は、10月末にミニャ・コンガ東麓で第1回のHailuogou(海螺溝)International Mountain Forumが開かれるので招待したいが、そこで話をしてくれないか。その前には、謝自楚(XIE Zichu)先生の80歳記念ワークショップがあるので、両方参加できますよ、ということだった。

わたしは退職して9年が過ぎており、現地に関して話すことも思い当たらない。年を経ての中国の一人旅に不安もあり、断ろうと思った。だが、自分が観てきたネパール・ヒマラヤの氷河の変貌について話せば、このフォーラムの趣旨にも合うのでは。懐かしい謝さんに会える得難いチャンスだし、ミニャ・コンガも眺めてこようか、と思い直す。行くなら、会合の内容次第では、その記録を学会誌かAACKニュースレターに投稿しようかとも考えた。

二つの会合に参加した結果は、謝さんのワークショップは内容があったが、中国語だったので理解不足。山岳フォーラムは、何のための誰のための会だったのか曖昧で書きようがない。だから、何も書かないことにした。だが帰国後も、松田宏也著『ミニャコンカ奇跡の生還』(文献1)を30数年ぶりに再読しながら、旅の余韻を引きずっていた。

そうしているうちに、この旅行中に思い起した事々は、中国がその西部の門戸を諸外国に開いた1980年代という特別な時期の事としてつながっていることに気づいた。それらを文章にしておけば、行かない/行こうか、書けない/書こうか、とゆらいできた気持ちにまとまりがつけられるかと思った。

2. 長沙への長い1日～1981年天山回想

出国前夜の2016年10月22日、関西空港近郊のホテルに泊まった。部屋のテレビで、エベレスト女性初登頂の田部井淳子さんの訃報が流れる。1990年、シャモニで開かれたアンナプルナI峰初登頂40周年記念祭でいっしょだった。その後テレビなどでもよく見たが、田部井さんの自然な人柄のおかげで、登山の良さが日本人により広く伝わっていったと思う。

翌朝、上海空港が台風による悪天で予定の便が欠航!あとの便に振り替えとのことで、チェックイン・カウンターの前に並んで待つこと2時間。ようやく順番がきたのだが、振替便の変更処理に戸惑う受付嬢の前で更に1時間!ジイ〜ッと我慢して立ちつづけた。

やっと出国審査室の入口に向かうと、チェックイン・カウンターから先の通路、待合・休憩スペースは長蛇の列が折れ曲がって隙間なく連なっていた。人波を強引にかき分けてトイレに行ってから、行列の末尾をさがして並ぶ。中国に入国してからの混乱は、ある程度覚悟していたのだが・・・

なんとか振替便に間に合い、東方航空の機中で缶ビールにありついたが、冷えていなかった。



写真1 1981年の日中共同氷河調査（天山ボゴダ峰域）。前列左から3・4番目が渡辺・謝さん。

上海空港で謝さんのワークショップがある湖南省・長沙への便に乗り換える。その搭乗待合場で、そのワークショップに参加する渡辺興亜さん（北大山岳部OB）と落ち合った。

渡辺さんは、できたばかりだった名大大学院・樋口敬二教授（AACK）の研究室の助手で、わたしは院生で入った。1970年代から始まるヒマラヤの氷河研究を、かれは若者頭として牽引していた。

1979年に名古屋で開かれた日本雪氷学会全国大会では、樋口教授らが中国科学院・蘭州氷河凍土研究所の施雅風所長らを招待した。これをきっかけに、初の日中共同氷河調査が1981年に天山山脈で実現することになる。渡辺さんは同行者として、当時山口大にいたわたしに声をかけてくれた。それがわたしにとっても、1987年の西崑崙やその後につながる中国での観測の出発点となった（文献2）。

それ以来、今回は35年ぶりの2人旅だ。長沙便は出発がかなり遅れるというので、待合場のレストランで、よく冷えたビールにありつく。

1981年の共同調査は、ウルムチから南西100 kmの山域で中国が1959年から定点観測をつづけている氷河と、ボゴダ峰北面の氷河を7-8月の約40日間で調査した（写真1）。中国側研究者は約20人、日本からは2人だけ。研究成果を出すため、かれらに負けじと奮闘する渡辺さんに付き合う。結局、調査成果報告書の論文全24篇のうち7篇の主著者が日本側だった。街での宴席では、乾杯を次々と求めてくる新しい友1人1人に、白酒の杯をその都度2人で乾しつづけた。

車で移動中は、昼食時でもビールが出た。もてなしには恐縮したが、助手席の床に置いてあったから、温まっていた。ボゴダ峰の調査キャンプで、朝にビールが出たこともある。その日の調査を終えてからと、水流に浸けておいた。

観光地へ案内されることもあった。現地の観光客は、カラになった空き瓶を粉々に割り散らかして帰るので、地面はガラスの破片だらけだった。列車の食堂車で窓を開けて食事していると、係員が掃除したゴミを前方の窓から捨てたため、それをかぶったこともあった。

外国人に開かれたばかりのボゴダ山域には、日本の登山隊も入っていた。約2ヵ月前には、京都山岳会隊の白水ミツ子さんがヒドン・クレバスに落ちた。「私ここで死ぬからー」「あぶないからー、もういいよー」と、声は聞こえていたそうだが、懸命の救助は実らなかった。追悼のケルンがあったので、お参りした。

わたしたちの滞在中に登攀していた天山会隊には、阪大OBの住吉ドクターが同行していて、ラーメン、ココアなどを差し入れてくれた。日本の科学者2人の見すばらしい防寒服姿を見かねた登山用具店長は、中国の羽毛がたっぷり入った防寒服を、帰国後プレゼントしてくれた。

わたしたち氷河調査隊のリーダーは、のち1987年の西崑崙調査（写真2）などでも同行する謝さんと、滞在中ずっと日本人2人に付けてくれた。ロシアで雪氷学を学び、英語はブロークン気味だったが、ロシア語風の発音で陽気に遠慮なく話しかけてきた。漢字の筆談が通じる効果は大きかった。

渡辺さんは中国の故事や歴史に詳しかったので、謝さんはある面では周りの中国人よりも気持が通じると感じたようだ。そして文化大革命の頃に研究者たちが受けた悲惨な実情や自国への思いを、本音で語ってくれるのだった。

2人の会話を感心して聞いているだけのわたしだったが、凍傷で指を欠いていることだけで、ユー・アー・ヒーローと言われていた。この単純さには、面くらった。北京大学で会った氷河地形学者・崔之久さんも登山で指を無くしたことで知られており、わたしはジャパニーズ崔之久だと言われた。

謝さんは自分のことを、チャイニーズ渡辺だと言ったこともある。そして、アジアはアジア人の手で調べよう、not アメリカ、not ヨーロッパ



写真2 1987年西崑崙共同調査の際、スノーモービルに驚いて氷河上を疾走するチルーの群れ。

パとも言った。

後年、渡辺さんは国立極地研究所に移ってから、謝さんを客員教授に迎えた。所内ゲストハウスで暮らす謝ご夫妻が毎朝、門前にある公園で太極拳をしていると、近所の人たちが集まってきた、人気の太極拳教室になったそうだ。

謝さんは蘭州で研究所長をつとめた後、長沙にある湖南師範大学に移った。かなり前に、大病を患っていることを中国の留学生から聞いていた。かれのことをふと思い出すとき、もうこの世を去られたのかもしれないと思うことさえあった。今回LIUさんからのメールで健在を知り、さっそく渡辺さんに知らせた。こうして彼も長沙での記念行事参加を決め、上海空港で合流したのだ。

長沙へのフライトは、結局3時間遅れた。到着を待っていた学生の車で、22時頃ホテル着。ここがワークショップの会場で参加者宿所でもあり、フロントでLIUさんに迎えられる。2人にはダブルベッドの広い2部屋が、1階違いで予約されていた。渡辺さんの部屋でウイスキーでくつろいだあと、寝たのは午前2時頃になっていた。

3. 氷河研究の旧友

翌24日、朝食の食堂で渡辺さんと合流。名大の雪氷学研究室に居たことのある懐かしい顔が見える。20年程まえに中尾正義さん(AACK)の指導で修士号を得たZHOU(周) Shinquaoや、日本学術振興会の特別研究員として滞在した張寅生らと再会。やがて食堂に入ってこられた謝さんご夫妻を見つける。感激の握手。元氣

そうで何よりだが、耳がかなり遠くなったようだ。

「学術研究会」のテーマは「雪氷変化とその影響」で2日間、参加者は約50人。内容は豊富で、総合、氷河、水文気象、凍土、資源、環境、謝先生学術思想研討と広範囲におよび、手法も観測、リモートセンシング、数値モデルなど、多岐にわたった。1980年代とは隔世の感があり、謝さんを元にした広がり大きさを思った。また、おおよそ20年程まえには学生だったLIU、周、張の3君が、今やこの会で冴えた存在感を示し、皆さんに信頼されている雰囲気を感じてうれしかった。

謝さんは会の冒頭で、中国氷河学研究の特色について講演。わたしは後日の山岳フォーラムでの発表予行演習を兼ね、Changing Cryosphere(雪氷圏) in the Nepal Himalayasを、渡辺さんは1981年の天山日中共同調査と南極観測の話をした。

学術研究会の初日の夜に、謝さんの80歳を祝う晩餐会が開かれた。誕生日は1月なのだが、寒い時期になるので早めたそうだ。研究会の案内冊子に「不提供酒水」との注意書きを見つけて、わたしは気がかりだった。そのとおり、晩餐でも完全なノン・アルコール。1980年代に調査を共にした旧友たちが、あのときと同じように次々と渡辺さんとわたしに乾杯を求めてくる。それはジュース・茶・コーラ類なので水腹がはるが、白酒の杯をその都度飲みほした昔に比べれば楽勝だった。この違いは、この会合だけのことなのか、それとも中国での時代の変化の一端なのだろうか。

4. 成都にて

2日間のワークショップを終えた夜、よく面倒をみてくれた周さんをさそって渡辺さんの部屋で白酒の中瓶を空ける。翌朝未明、渡辺さんは帰国の途についた。おなじ26日、わたしは成都へ飛んだ。窓からは雲しか見えなかった。

かつての調査は、いつも蘭州を基点に車で回ったので、成都是初めてだ。宿は中国科学院の宿舎。近くの食堂で、張文敬(ZHANG Wenjing)さん、LIUさん、フォーラムの招待元・海螺溝景区管理局のチベット系女性ほかと食卓を囲む。

張さん(写真1の後列右端)は天山、西崑崙

などで、若者頭のような活躍をしていた。かれは渡辺さんが南極観測隊長だった1987-88年の夏隊に参加したこともある。1993年に蘭州から成都へ移った。今71才になるが、65才の定年後も成都山地災害環境研究所での仕事を続けながら、作家業にも精をだしているようだ。今夜は孫を連れてきている。

料理の皿が次々と食卓に載せられるなか、白酒とビールで乾杯が繰り返される。これぞ、かつてと同じ中国だ。それにしても、現地管理局の女性スタッフの飲みっぷりには、かなわない。

彼女から、昔コンガ山で遭難した日本人を現地の人たちが救出した話が出る。これは皆さん憶えているようだ。わたしにはその前年1981年、友人の阿部幹雄さんが参加した北海道山岳連盟隊（文献3）で8人が亡くなった記憶の方が強かった。うち7人は1本のザイルにつながって滑落したのだ。だがこの遭難は、皆さんに憶えはないようだ。救出の事が長く記憶に留まっている理由は、その生還の記録（文献1）を帰国後に読み直してよく分かった。

翌日はLIUさんが歴史博物館を案内してくれ、旧繁華街で四川料理の昼飯を食べる。宿に帰って休んでいると、部屋の電話で起こされ、受話器に大声が飛びこんできた。ZHENG Benxingさん（写真1の前列左から2人目）だと、すぐに分かった。別の学会があって、この宿舎に泊まっているという。

かれは天山調査の翌年、ネパール調査に渡辺さんから招待され、わたしも同行した。1987年の西崑崙でも一緒だった。調査後かれのガイドで、寄贈したランドクルーザーに乗って南下し、ナムナニやチョモランマなど、ヒマラヤ北面の氷河に寄るはずだった。だが現地で許されず、かなり北に離れたルートを進むことになった。かれは行けると約束していたのに、その時のわたしの失望と不満は大きかった。

この時にチベット高原を周回する意図は、その後のチベットでの氷河調査の将来計画の目安を得るためであった。これまで天山・西崑崙と乾燥域の氷河を観測対象にしてきたが、それを湿潤域に広げ、異なる気候のもとでの水循環と氷河について広域的に研究したかった。

そこで1989年には調査地をチベット高原中部のタングラ山域、さらに高原南東部のニエンチェンタンラ山脈東端へと伸ばすことにした。

だが6月初旬、天安門事件勃発のニュースが入るなか北京へ飛び、蘭州まで行ったものの日本政府の帰国勧告が出た。すでにタングラ山域で観測していた隊を呼び戻し、無念の帰国となる。

勧告解除を待ち構え、8月末に再出発。ラサを過ぎて調査地への道中では、ナムチャバルワを数十キロの距離で見ることができた。そうして初めて、湿潤・多雪のため森林帯まで流下する長大な氷河に出会うことができた。

ある街の路上で、靴の修理職人が道具を並べて仕事していた。珍しくて写真を撮っていると、「公安」に連行されカメラを没収されてしまった。謝さんの後を継いでこの隊から中国側リーダーになっているYAO Tandongさんが懸命に説明してくれ、フィルムの没収だけで収まった。貧しい中国の実情を宣伝しようとする反乱分子と思われたようだ。キャンプ中、短波ラジオでダライ・ラマのノーベル平和賞の受賞が報じられた。アメリカ留学帰りのYAOさんとはずっと親近感が保てたが、このニュースを知った彼の表情を見た時に限っては、国の違いを痛感した。

5. 国際山岳フォーラム

翌28日昼食後、成都からフォーラムの会場である磨西（モーシィ、高度約1600m）まで、参加者は2台の専用バスに分かれて300km余り移動する。わたしの乗ったバスは前部を先客が占めていて、なぜかイスラム系らしい人達が多い。これまでフォーラムのプログラムや参加者などをたずねてきたが、何も分からなかった。インターネットで検索しても何もヒットしない。ここでバス2台の分乗者名簿が配られ、はじめて参加者を知ることになる。先客はパキスタンからだった。中パは友好関係にあるが、パキスタンとハイローゴー（海螺溝）のつながりが分からない。

バスは長江上流域に至り、曇天に山景色がモヤッと見える。19時頃、モーシィの宿となる海螺溝長征大酒店（Changzheng Hotel）に到着。ホテルのフロントで、ようやく待望の日程・プログラムなどのガイド冊子が配られた。

MONOGRAPHと表紙に書かれた200頁の冊子も渡される。事前にわたしは講演概要の提出を求められ原稿を作成・電送したのだが、冊子の中身のほとんどは、既に刊行された参加者



写真3 国際山岳フォーラム参加者の集合写真
(長征ホテル玄関にて 2016/10/29)

の関連論文で占められ、その分厚くなっていた。この冊子には参加者の顔写真入り紹介文も掲載されていた。わたしの紹介文は誇大に書かれ、写真は雲南懇話会で演者になった時の同会ホームページの写真が使われていた。

この山岳フォーラムのキーワードは、気候変化、環境保護、コンガ山、ハイローゴ、氷河、森林、山岳ツーリズム、エコロジー、発展持続などである。フォーラムのガイド冊子を見ると、演者数は、米・印・デンマーク各1、日2、中8。ほか参加者には、パキスタン7人、スーダン1人、中国35人がリストアップされている(写真3)。

「学術報告」の会は翌29日のみ、ホテルから歩いて数分の地区管理局の会議室で開かれた。講演の冒頭は、1981年に蘭州で知り合ったQIN Daheさん。かれは今や中国科学界の重鎮で、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)の中国代表でもある。IPCCや地球温暖化について講演した後、超多忙なのか退出した。

次に米国の植物学者がこの地域での現地調査を紹介した。中国人の専門家が通訳するが、自分の話も付け加えているようだ。演者から“You are talking much more than me”と言われ笑いをさそっていた。次の順番のわたしにもし通訳が付けば、自分では10分程しか話せないのだ

が、登壇するまで分からなかった。幸い通訳は出ず、かつてAACKニューズレターに書いた話(文献4)を軸に、準備した通り進められた。

デンマークの青年は自国の氷期の氷河について話をしたが、このフォーラムの趣旨とのつながりが分からなかった。日本からのもう一人の参加者は古居智子さん。屋久島に移住し、作家としてまたNPO法人屋久島エコ・フェスタの理事長として環境問題に関わっている。原生林を自然公園として維持するハイローゴ地区のフォーラムにふさわしい招待演者だ。

参加者の大部分は中国人だが、英語の発表がどれだけ理解されたのだろう。旧知の研究者が蘭州から5人参加していたが、普通に英語の会話が出来るのはLIUさんだけなのだ。パキスタンやスーダンからの青年に演者はいなかったが、皆しっかりした好青年で、好感がもてた。発表された分野は、山地災害、農業、山岳エコシステム観測、環境問題にも及んだが、総合討論のような総括の場はなかった。

ホテルでの晩餐会は、豪華な料理が並んだ。隣席のインド人に用意されたベジタリアン料理もうまそうだった。地元チベット系女性トリオの歌にはアンコールが繰り返された。かつての中国のワインは甘すぎたが、口に合うドライなワインと白酒が飲み放題で、乾杯を繰り返し



写真4 ミニャ・コンガとハイローゴー氷河。
市川山岳会は右から高巻きしアイスフォールの上に出て、頂上部から右に降りる奥の稜線を越えた。
(高度約3600mの展望台から2016/10/30)

で盛り上がった。

6. 「ミニヤコンカ奇跡の生還」

フォーラム2日目の翌30日は、最後の行事「野外考察」だ。モーシィまで乗って来た2台のバスに同じメンバーで分乗し、わたしは眺望の良い最後尾の席に座った。ハイローゴーの谷筋に沿って、ガスのなかを登っていく。

途中で皆が下車するので、訳が分からないま付いていく。広い休憩所があり、トイレ休憩か。そのうち、うっそうとした森へ入る石段を、一行はバラバラに下り始めていた。何かを見てすぐに戻ってくるのだと言われ、待つことにする。ところが、これが当地の目玉の一つ、森林公園を歩くコースだったのだ。すでに専用バスは、空車でコースの出口へと先行していた。若い地元係員が乗合バスを待ってわたしを乗せてくれ、コースを登り終えた一行と合流できた。

最終目的のロープウェイに到着。全長3.5km、高度差420mで、ハイローゴー氷河下流部の上を渡り、15分程でミニャ・コンガ（高度7556m）の展望台（高度約3600m）に至る。8人乗りのゴンドラから外を見つめ続けるが、ずっとガスの中だった。

ところが上の駅に着いた時から、中国に来て8日目で初めて雲が晴れてきた。急峻な山頂部は去来する雲をかけながら白く輝き、ハイローゴー氷河の荒々しいアイスフォールと岩層でおおわれた下流部、そして対面の左岸側山稜はよく見えている（写真4）。展望台でミニャ・コンガをバックに、氷河研究仲間との記念写真撮影が繰り返された。

下りのゴンドラからは、氷河のクレバスや岩層で被われた末端部を眼下に、また左岸の森林斜面を対面に見つめていた。北海道山岳連盟の登山ルートは尾根を隔てた北側の氷河で、翌年「奇跡の生還」と言われた市川山岳会ルートも同じで見えないと思っていた。だが、現地ではハイローゴーのイ族が救助したという。わたしは松田氏の生還ルートを目の前にしているのだろうか？

翌日モーシィからバスで成都へ、あくる11月1日、関西空港への直行便で帰国した。次の日から数日間、一時は39℃を越える高熱が続いた。その間、気になって書棚から『ミニヤコンカ奇跡の生還』を出し、巻頭・巻末などルート図のありそうな頁を大まかにさがした。だが地図の類が見つからない。

11月6日には東京で、北大山岳部創立90周年を記念する祝賀会が予定されていた。わたしは長沙にいた時、このような記念の場で、北大と京大の山岳部OBたちが協力しあってヒマラヤ・チベットや南極の氷河・氷床研究を開拓し、国際的にも貴重な成果を上げてきたことを、北大への感謝の気持ちを込めてスピーチしておこうと思った。会の前日午後から熱は下がって上京でき、各大学からのスピーチの順に加わり思いは果たせた。会場で会ったAACK斎藤博士の見立てでは、わたしはインフルエンザにかかっていたようだ。

帰国後やっと落ち着いてくると、松田氏の著書にルート図がないものかと、頁を1枚ずつめくる気になった。図は32-33頁にあった。イラスト風にモディファイされていたが、概略は分かる。市川山岳会の登山ルートそして松田氏の帰還ルートは、わたしが現地でジッと見つめていた所にあった。こうしてわたしは、この本を30数年ぶりに読み返す気になった。

表紙カバーに「独占手記」と書かれたこの本は、冒頭から頂上アタックの最終局面で始まる。

ところが、場面は登山行程を行きつ戻りつし、さらに日本であった事の回想も織り込まれながら、読者の緊迫感は途切れて混乱する。本の扉に「構成＝」として、著者名と同じ大きさで構成者名が記されているが、作為的な構成に耐えながら読み進んだ。

頂上には実力のある2人で迫ったが、悪天もあって断念し、下山の途中で1人は動けなくなる。他の隊員は、帰らない2人を遭難死と判断し撤収していた。だが松田氏は、手足に重い凍傷を負いながら、生還への執念を捨てなかった。

自力でたどり着いた最終地の小屋で、かれは夢を見た。それは、わたしがヤルン・カンの頂上からの帰途で彷徨し、絶壁のきわでウツラウツラしながら見た夢と通じるところがある。たがいの状況はかなり違うので不思議だった。

頂上直下から下り始めて19日目、小屋に着いて3日目、水辺へとほう彼を見つけたのが、イ族の親子4人。松田氏が発したのは「モーシィ！ モーシィ！ モーシィ！（へ連れていってくれ）」だった。モーシィには病院があった。100kmの崖道を100人を越える人たちが、かれを担架に乗せて大雨の一昼夜を休まず運んだ。体重は以前の半分ほどに落ちていたという。「アマゾン」でこの本が紹介されているペー

ジのカスタマーレビューでは、かれ（ら）の登山行動などについて批判的な意見は多い。もっともではある。その後、義足を付けて厳しいイリバビリを重ねて復帰した松田氏は、現地への感謝の訪問などで当時の日中友好関係のシンボリックな役割を果たした。インターネットでは、講演する近年の円熟した彼の映像を見ることもできる。自らは言わないが、助けてくれたイ族4人に今も経済的援助をつづけているらしい。

あらためて今回の旅を振り返ってみると、中国西部への扉が開かれた魅力に満ちた時期をわたし自身が体験できたことは、幸運な巡り合わせだったと思う。あの頃の高揚した時間を偲ぶ旅ができたことを、中国の友人たちに感謝したい。

文献

- 1) ミニヤコンカ奇跡の生還. 松田宏也, 1983年, 山と溪谷社, 全278頁
- 2) ヤルン・カン後、わたしの四〇年. 上田豊, 2013年, 本誌65・66合併号, 8-11
- 3) 生と死のミニヤ・コンガ. 阿部幹雄, 2000年, 山と溪谷社, 全318頁
- 4) 空撮で見たヒマラヤの変貌. 上田豊, 2008年, 本誌45号, 1-5

第42回雲南懇話会 (2017年9月24日開催) 講演概要

山岸久雄



第42回雲南懇話会は2017年9月24日(日曜)、東京都千代田区神田の明治大学リバティータワーで開催され、73名の方に参加いただきました。以下、講演の概要を紹介します(概要に添えられた講師写真、会場風景は金井義介さ

んに撮影いただきました)。

①雲南から拉薩へ茶馬古道を辿る

—滇藏公路(G214)から川藏公路南路(G318)へ—
カワカブ会、AACK 岩脇康一

チベット自治区東部、三江併流地域から然烏(ラウオ)に至るカム地方は2009年以降、入城が困難になっている。AACK会員小林尚礼氏が主宰するカワカブ会は今



年5～6月、徳欽から塩井経由でこの地域に入り、約1週間で拉薩へ至る旅を企画した。講演者はこの旅に参加し、久方ぶりにこの地域を通過する日本人の眼で見た現地の状況を、多くの写真を使って紹介した。

旅のルートは雲南と拉薩を結ぶ、かつての隊商交易路「茶馬古道」と重なるため、過去の歴史に触れる機会が度々あった。道路は直線化され、トンネル、架橋により中型バスで高速走行が可能となっており、過去「悪路」とされていたバルンツァンボやロンチェ周辺も全く問題ない。周辺の大都市から入城する際に障害となる5000m前後の峠もトンネル化が進んでいる。拉薩～林芝を結ぶ高速道路は林芝側80kmが供用済で、全線開通に向け工事が進んでいる。瀾滄江横断地点「竹卡」は市街が拡大し、怒江横断地点には「怒江大橋」が建設中であった。カム地方の都市では高層ビルが続々と建ち、コンボ地方では大々的な都市再開発が進行中である。

これら山南地区には観光資源や、未踏の山城（崗日嘎布山群、ラグー氷河、ミャンマー方面の山群）が数多くあるものの、外国人の入城はまだ難しい。一方、自然景観が美しいG318沿道では大規模観光開発が進行中で、立派な施設ができていく。拉薩（貢嘎空港と青蔵鉄道）と林芝（米林空港）から入り、然烏まで公路を往復するコースが一般的なようだ。この地域では映画The way to Lhasaでも見られるように、自転車、徒歩、オートバイ、車で拉薩を目指す人達が多いことが印象的であった。五体投地も1グループ見受けられた。

②アルタイ山脈のユキヒョウと遊牧民 —生態観察、獣害対策、民俗伝承の複合型生物誌の研究—

早稲田大学高等研究所 助教、Ph.D.
相馬拓也

講演者は第35回雲南懇話会でモンゴル西部のイヌワシを用いた鷹狩文化について講演されたが、今回はユキヒョウについての講演である。ユキヒョウは現在、モンゴル国内に600～900頭生息しており、絶滅危惧IB類に登録されている。最近、モンゴル西部の山地ではユキヒョウが頻繁に遊牧民に目撃されるようになり、2014年を境に遭遇事故、家畜の襲撃被害が急増している。これに対し遊牧民は、法律で保護されているユキヒョウを私的に駆除する等の応酬的措置をとるようになってきた。



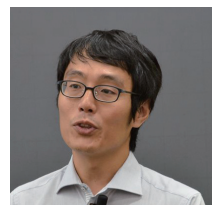
講演者はユキヒョウと遊牧民の間の持続可能な共存圏の確立に向け、ホブド県の4ヶ村で保全生態学的調査を行った。調査は(1)ユキヒョウの生態行動観察、(2)家畜被害の現状と獣害対策、(3)ユキヒョウに関する伝承・儀礼等の調査、という3つの研究領域にわたる「複合型生物誌」調査である。(1)については、トラップカメラやドローンを用い、成獣13個体、幼獣4～5個体を特定した。(2)については遊牧民105世帯について聞き取りを行い、目撃180件、遭遇53件、仔馬の被害104頭（内、89頭が死亡）を確認した。最近の被害急増の原因として野生の草食動物が2009～2010年の雪害で多数死亡し、ユキヒョウの食餌環境が悪化したことや、保護政策によりユキヒョウが人間を恐れなくなったことが挙げられるが、一方、遊牧民側の原因も考えられる（ユキヒョウの餌になるタルバガンの乱獲、家畜の過大所有と過放牧、家畜防衛の怠りなど）。(3)については、ユキヒョウを狩猟で殺した場合に行われる「ユキヒョウ送りの儀」が多数確認された。この儀式は遊牧民がユキヒョウに対して抱く聖性・禁制の気持ちを象徴するものであろう。

現在、遊牧民の間には家畜被害に対する政府の対策遅れ、補償制度の不在について不満が募っているが、かつての遊牧民はユキヒョウによる家畜被害を「自然への返礼」と見る環境共生観・保全生態観を持ち、それを伝承や儀式を通じ伝えてきた。遊牧民がこのような観点に立ち返り、政府に依存するよりも、自ら能動的に家畜防衛に取り組むことがユキヒョウと遊牧民の望ましい未来につながるであろうと講演者は指摘する。

③明治大学体育会山岳部「ドリームプロジェクト」を振り返る —一部員・OBによるヒマラヤ8000m峰14座完登の軌跡—

明治大学山岳部炉辺会、フリーライター
谷山宏典

明治大学山岳部、同OB組織である炉辺会によるヒマラヤ登山は1965年のゴジュンバ・カン(7646m)初登頂で始まった。炉辺会員による初めての8000m峰登頂は



1970年、植村直己氏によるエベレスト登頂（日本山岳会隊）であった。以後、彼らはヒマラヤ登山隊を編成したり、他組織のヒマラヤ登山隊に隊員を派遣するなどして多くの成果を挙げた。

1997年、炉辺会はマナスルへ8名の登山隊を送り、同会独自の隊として初の8000m峰登頂に成功した。この時点で、同会員による8000m峰登頂は10座に達していた。そこで、数年後に控えた明治大学創立120周年（2001年）、山岳部創部80周年（2002年）の記念事業として、残る4座を登り、8000m峰全14座の登頂を達成しようという計画が立てられた。これが「ドリームプロジェクト」であり、1999年に発足し、2003年のアンナプルナI峰（8091m）登頂をもって完結した。その記録は講演者の著書「登頂八〇〇〇m－明治大学山岳部14座完登の軌跡」にまとめられている。講演者はドリームプロジェクトの一員であり、2001年のガッシャーブルムI、II峰の登頂者である。講演では14座の登頂の経緯が、登頂順を追って、写真やエピソードとともに紹介された。

明大山岳部では数年に一度、すべてをヒマラヤ登山に捧げる若者が出現したという。彼らが中核となってヒマラヤ登山が行われ、ここでの成功経験と自信はOBとなった彼らを更に8000m峰へと向かわせていった。このようにして炉辺会には8000m峰登山の技術と経験が継承・蓄積され、ドリームプロジェクトの成功へとつながっていったのであろう。「山岳部でしっかり国内登山の訓練を積み、ヒマラヤに通用する」という言葉の重みを感じさせられた。

④モンゴルの馬乳酒の製造方法

－遊牧知の検証－

明治大学総商学部／

大学院教養デザイン研究科 教授 森永由紀

馬乳酒は古来、遊牧民が各家庭で馬の生乳を発酵させて作る、酸味のある飲料であり、アルコール度数は数%と低く、その効能は良く知られている。旧ソ連諸国、中国、ヨーロッパでは20世紀に進められた遊牧民の定住化政策の影響で馬の数が減り、今や馬乳酒は工場で製造される健康食品となっ



ている。一方、遊牧が現在でも基幹産業であるモンゴル共和国では多くの地域で馬乳酒が生産されており、幼児も含め老若男女が大量に飲み、夏場は食事をとらずに馬乳酒だけで過ごす人さえいる。

講演者らは2012年にモンゴル気象水文環境研究所の気象観測網を利用して馬乳酒に関する全国調査を行った。多くの地域で馬乳酒が日常的に飲まれ、伝統的な製造法も残っていることが明らかになったが、馬乳酒はどこでも作っているわけではない。モンゴル中央部が主産地であり、名産地も多い。モンゴル東部は馬をたくさん飼っているが馬乳酒は作らない。講演者らは馬乳酒の名産地であるボルガン県モゴト郡の協力を得て、馬乳酒製造にまつわる自然科学的および文化人類学的研究を開始した。

2015年、明治大学に馬乳酒研究所が設立され、自然環境、栄養学、社会学などの研究者が参加し、学際的な研究が行われている。2016年にはモゴト郡で、試料収集を主目的とした馬乳酒品評会が開かれ、51家庭から馬乳酒の提供が得られた。今後、これらを試料とした科学研究が行われる。講演者らは遊牧民と「おいしい馬乳酒をどう作るのか？」という問いを共有している。遊牧民はおいしい馬乳酒を作りたい、振舞いたい、売って収入を得たいと願っている。講演者らは科学的な研究により、この問いの答えを見つけ出し、彼らに還元したいと願っている。

第43回雲南懇話会のご案内

第43回雲南懇話会を以下のとおり開催致します。

1. 日時：2017年12月23日（土）13時00分～17時30分。その後、茶話会。

2. 場所；国際協力機構研究所、国際会議場（東京都新宿区市ヶ谷本村町）

3. 懇話会の内容

①「モンsoon・ヒマラヤに花を求めて～ブータン・ネパール紀行」

青いケシ研究会、JACアルパインフォトクラブ、カワカブ会 松永 秀和

②「ブータン王国の諸言語について－言語多様性の現状と課題－」

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 准教授 西田 文信

③「ロヒンギャ問題はなぜ解決が難しいのか
— その歴史的背景について考える —」

上智大学 アジア文化研究所 教授
根本 敬

8000m 峰への登高行—」

登山家、高峰ガイド、
日本勤労者山岳連盟名誉会員、
日本山岳協会国際委員、
Snow Leopard award 受賞者、
8000m 峰 9 座登頂者 近藤 和美

④「ヒマラヤの高峰登山 — 20 数回に及ぶ

原稿募集

笹ヶ峰ヒュッテについて

笹ヶ峰京大ヒュッテは昭和 3 年（1928 年）11 月に完成し、大切に使われながら受け継がれてきました。戦後の困難な時期や、大規模な修繕を経て、初代の建物は築 70 年を過ぎたところで老朽化により立て替えられ、現在は二代目の建物が多くの利用者を迎えています。

来年、2018 年は、笹ヶ峰ヒュッテの完成から 90 年目にあたります。そこで、Newsletter ではヒュッテに関連する原稿を募集します。皆様、どうぞご寄稿をお願いいたします。

<原稿作成の要領>

原稿は、本文だけを、一般的な横書き文書の形式で作成してください。原稿の字数・行数は特に指定しません。印刷時の形式に合わせる必

要はありません。

ワードプロセッサを用いて作成し、電子メールに添付してお送りいただくのが便利ですが、手書き原稿など紙媒体の原稿でも結構です。手書きの場合は市販の原稿用紙などをご利用ください。

写真や図は、本文とは別のファイル（または別紙）でお送りください。

写真、図などの説明は、本文の後に、まとめて付けてください。

不明の点は、編集人に、なるべく電子メールでお問い合わせください。

原稿の送り先は巻末をご覧ください。

編集人 横山宏太郎

編集後記

各地から雪の便りが届くようになりました。雪国では、雪囲い、タイヤの交換、除雪機の整備、消雪パイプの動作確認など、様々な冬の備えが必要です。いまは最後の追い込みといったところでしょうか。

当地にとって昨冬は、平野部では雪が少なく、スキー場のあるあたりでは十分な積雪と、私には理想的な雪でした。この冬、長期予報ではほぼ平年並みの雪とのことですが、どうなるでしょうか。

今号も、おかげさまで興味深い内容でお届けできました。著者の皆様、ありがとうございました。

来年は、チョゴリザ初登頂 60 周年、笹ヶ峰ヒュッテ 90 周年にあたります。もちろんテーマはそれらに限りません。ふるって原稿をお寄

せください。

横山宏太郎

発行日 2017 年 11 月 30 日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究 2 号館 4 階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町 1-8
(株)土倉事務所